

# 昭憲皇太后陛下の御坤徳（一）若葉のかけ）

下 田 歌 子

皆様失禮でございますが今日は、昭憲皇太后陛下の御忌月御忌日に當らせられますので、御懿徳に就て何か謹述致しますやうにと云ふ御依頼でございましたので、お受けを申し上げます今日此處に出ましたが、私は先帝及び皇太后兩陛下の御懿徳に就て若くは御遺蹟に就てお話を申し上げますことは今日が初めてでございます。勿論事に觸れ、をりに合ひて少し宛は謹述は致しましたが右の次第でありますから特に無調法な事であらうと恐縮致します。詰らないお話でも少し言ひ馴れて居りますと多少順序立が出來て居りますが、今日は今申上げます通り初めてでございますから、尙お聴きにくい所が多からうと存じます。それは何故そんなかと申しますと私は誠に此皇室といふことに就きましては、親は遂に終世非常にひどい目になつて一生盡してしまひました。さういふ家庭に育ちまして、是はこの尊皇心が宗教的に出來て居りますので吾々のやうな數ならぬ者が左様な至尊の事を申上るといふことは寧ろ越權であるといふやうな妙な感じが致しますからでございます。

先帝陛下の愈々御大患といふ事を承りました其時私は實は失神したやうに驚いて殆ど倒れましたので

ございます。洵に甚だごうも恐懼の至りでお恥かしい次第でございますが、それから一層耳を悪くしまして、醫者からも餘程變だと苦笑せられたやうな譯でございました。其故に兩陛下の崩御の時には新聞雜誌の御承知申上げて居る方が何か御逸話をと言つて段々來て下さいましたが、私は片言隻語も口を開かずには済みませんでした。ごうも變な心持になりました。申上げにくうございますので、却て間違つたことを申上げては尙恐懼の至りであると存じまして、其當坐は一言も申さなかつたのであります。段々年月が經ちますと人間は妙なものでありまして、もう少し心が鎮まつて參りましたので、畏くありませんが御懿徳に係りました事を修身倫理の講義には自分の生徒には少し話して聽かせる必要があると考へまして極くちよい／＼とは話して居りますけれども、順序立つて話を致したことがありませんので、今日はごういふやうにお話を致しませうかと考へましたが、段々世の中が危険思想とか何とか申しまして不可思議な現象を呈して參りますので、是は自分がごうもそんな變な、頑固な考を以て假にも少々でも承り居ります所の御懿徳を、皆様と御同感を分つてお惚び申上げないといふことは寧ろ間違つて居る。斯ういふことを考へまして今日初めて口を開いて皆様に申上げます次第でございますからごういふやうにお話しよるかど存じまして私は寔に今日は心配致して參りました。私は洵に呑氣な流義で、又餘義なくされて一體は嫌であつたお饒舌をしなければならぬやうな役目になつてしまつて、私は色々の事を申しますが、暇が無い爲に申譯がございませぬけれども、ちゃんと腹案を立て、原稿を作つて講演を致したことが容

易にないので、まゝ其時にどうにかならうと云ふくらゐな何時も誠に疎雑なお話を申し上げまして恐入つて居りますが、今日は私は昨晩色々なことを書いて見まして初めて原稿を持つて参りました。それで何から申上げようかと存じますと矢張言葉が溢ります。富士山に名吟は無い、釋迦孔子に好き讚は無い、讚をした詩歌の方が却て其人格を悪くして居ると申します。どうも吾々が、明治天皇、昭憲皇太后兩陛下の御徳を申上げましたならば、寧ろ反對に御徳を損ひはせぬかといふやうな恐れがございます。それ故に先づ御製、御歌を旨と致しましてそして御逸事も私の心得て居る丈のをお話申上げましたらば先づ確實なことである。御遺蹟に就て間違ひではないといふことだけは言はれませうから、それだけを申上げようと考へます。

尙ほ私が御仕へ申上げましたのは全く女官の末席でございまして、年から申しますれば十代から二十五に達しない前でございますので、記憶を辿りましても覺束なからうと恐懼致しますので之を取出しました譯でございします。一體偉人が世に出まして種々立派なる事蹟を擧げられた其人の傳記を東西古今に就て調べて見ますと全く天稟の人もございます。生れながらにしよう變つて居つて、それが少しも變化なく段々向上進歩して立派になる人もございます。又は幼年若くは青年甚しきに至りますといふと老年になつてさへも變つて凡庸と思つて居た人が非常な偉人の仲間入をして、偉い仕事をする人もございますが其多くは何かに發奮する所の動機があつた、さういふ方が多いやうに考へます。恐れながら、昭憲

皇太后陛下に於かせられましたもさういふやうなことがあらせられたと云ふことを私は思ひ起します。何時頃でございましたかどうも時期を忘れましたが御假床であらせられました。御恙で御引籠であらせられて、雨の降る日でございましたが、その日まことに御表の方が御忙がしくてお傍には餘り人少なであつた。其時に色々な古今の御風雅の御話即ち學事談があらせられて其時に「自分が謂は一寸幼少の時の失策話を聽かして遣はさう」といふお沙汰でございまして、それで皆有難くごぞ願ひますと申し上げます昭憲皇太后陛下即ち當時の皇后陛下のお話にお八歳の時——御承知の通り陛下には一條左大臣忠香公の第三の姫君に渡らせられて、お姉様がお二方、其次が美子姫、それが即ち昭憲皇太后様であらせられます。仰せられますには「自分は姉とさう年が違はなかつた」何でも二つ三つづゝ位お違ひ遊ばした、お姉様、それから皇太后様、皆さん少しづゝの御年違ひであります、有名な京都の貫名先生に先づ漢文を御學びになりました。御七歳の年からお姉様もお始めになりましたが御自分もお始めになりました。所が此處にはさういふことを御承知になつてお居でのお方は一人か二人位御出でになります、昔は漢文を教へると申しますと所謂素讀でありまして何だか譯が分りませぬのに「大學朱喜章句」と言つて教へられる。今のやうに「ハトハナ」と云へば子供の誰にも分りませぬけれども、どうも「大學朱喜章句、子程子曰」では解りませぬが、昔の漢文素讀でございましてから、皇太后陛下にも御姉様と大學朱喜章句を御習ひになりました。それから論語になりました。其頃であると仰せられました。所が

御二方の御姉さんはもはや御長年でもあらせられますから御熱心で、先生が見られましたと斯う申上ますと「はい」と仰しやいましてちやんど机に向つて御待ちになる。さうして先生の素讀が始まると先生の素讀の濟みます迄、少しもお厭ひにならぬ、斯くして御上の方々から順々に一方へに上げますさうすると美子姫の順になりますと御自分は誠にお嫌ひで、御自分仰しやいますのに、もう御姉様の方が濟みさうになつて御自分の順になりさうだといふと、ふつと御庭に御駈出になつて植込の中などに御隠れになる。そりやまた御居でならぬといふので大騒をして御附の人々が御捉へ申して「あなたは何といふ御方でございます。若様でもこんな御方はありやしませんと言つて小言を申上げる。三度に一度は捉へられるが二度は御逃出しになる。厭でく面白くなくて、もぢくして居らしやるので、先生からも「あなたのやうな御姫様はありやしません。ちやんとして遊ばせ」といふ小言が出る。誠に厭でく本が嫌ひだ」と仰しやいますので「こんな子はしかたがないから田舎へでもやつてしまはなければならぬ」といふことを御父上様なども仰せられたさうであります。それを畏れ多くございますが、ふと私は思ひ出しましたのは一昨日丁度學年が始まりました丁度生徒に修身を咄さうとして其事を申しますので思ひ出しましたが、其御八歳の時に丁度今時分春の末頃のことでございます。矢張植込の中へ御隠れになつて捉へられて御出でになりました、論語を開いて素讀が始まりました、丁度其時の句は「苗而不秀者有矣夫、秀而不實者有矣夫」といふのであります。丁度苗賣が「苗々 若苗」と言つて賣りに參ります苗であります。

す。そこで皇太后陛下は其時そこを讀みかけて御措きになりました。「貫名、苗とは何だい」と御尋ね遊ばした。「そこに生えて居ります稗槇の苗、稗槇の苗とは少し違ひますけれど、それに似て居ります。能く御氣付きになりました。さういふやうに文章の中の言葉に御氣が止りますと御好きになります」斯う言つて初めて褒められ遊ばした。其褒められたのが面白さに「それでは此處を講釋してお呉れ」と仰せられます。先生は「是はもつと十歳を御越しになりましたと講釋せぬのでございますけれども、それでは之を講釋して御聽かせ致しますえう」斯う言つて貫名先生が御講釋を致しました。「あの苗は百姓が畑を打ちまして水を入れて種子を下して、それから肥料を施して、幾度も暑い時に田の草を取つて、それからやうく實つて蒔入を致します。其蒔入を致します迄に幾多の艱難辛苦と費用がかゝります。同じやうに育て、同じやうに出来る苗が或ものは漸く苗だけは出来たけれども立枯になつてしまふ、或ものは穂だけは吹いたけれども實らずに黒ん穂になつて枯れてしまふ。誠に世の中の事は不思議なもので、どのやうに同じやうに致しましても或者は成功を致しませぬ、或者は成功を致します。其上に種子になるやうな良いお米もあり又小米のやうに碎けてしまふやうなものもございます。（其時分には君様と申上げましたから）君様は此立枯になるのが宜しうございますか、しいなになるのが宜しうございませぬか、若しくは種子になつて再び世に出るやうな良いお米になる方が良いと思召しますか」良いお米になつて種子になりたいよ」と仰せられた。先生「それでは御本が嫌ひではいけません、何でも人に優れ

て入らつしやらなければなりません」。「さういふことを話して呉れた、それから一體本當の苗は何處にある」と仰せられました御別荘のやうなものが大井川の畔にあらせられたやうでございますが其處のあたりに田植がある「田植に連れて行つて呉れ」「今一箇月するとお連れ致しますせう」といふことでそれから田植の頃に御連れ申すと、さあ一生懸命に御覽になつて歸らうと遊ばさぬ「幾ら見て入らつしやつても同じでございますからもう歸りませう、もう歸りませう」と申上げるけれども「私はもつと見て居る」と仰しやつて却々御歸りにならうとは遊ばさぬ。さて御歸りになりますと大變それから本が御好きに御成り遊ばした。其代りたゞ讀む斗は御嫌ひ、何でも聽かして貰ふのが御好きで、何時でも講義が御好になつた。「私はあの一句が我を起して呉れたと思ふからしてあの章に對する時に何時でも感謝して敬禮をしたいやうな心持になる」といふお話でありました。誠に有難いことで、是はごうも論語などいふものは殆ど死んだやうになりましたけれども、皇太后様の此御言葉で此論語の字は生きますと申して有難く御話を承りました。誠に是は驚くべきことでございますが、御八つの御年から御發奮を遊ばして、もう大變な御學問が御好きに御成り遊ばして、それから家は家にはかり這入つて本ばかり讀んで居らせられますから誠に心配だと言つて、少し蒲柳の質であらせられたから親御様が其後は御心配成され、たさうぢやけれども、八つの時まで御本が大嫌な、やんちゃであつたといふお話を承りましたが、私はごうも甚だ良き御教の一つであると恐懼して御聽きを致して居ります。誠に意味の解らなかつた本であ

つたから御嫌ひであつたのでこゝに陛下の所謂蛇は寸にしてその氣人を呑む底の不世出の御資質を見出し奉る事が出来るのであります。

此處に私は八首ばかりの歌を寫して參りましたが、是は大抵刊行になつてもう世に公になつて居ります。唯二つばかり世に公にならないのがございますが、此公にならぬのは恐れ入りますが、御歌としては以上の御名歌が外に澤山あらせられます。流石に刊行になつて居りますのは御歌として御尊敬を申し上げますから、さうして此御歌は私が宮中に居ります時に御讀み遊ばした御歌でありますから、それだけ今日御話申上げてお暇申上げやうと存じます。

こゝにわかしめしむしろはせまくとも

ひろくたつねんふみのはやしを

是はまあ、陛下は御歌人で畏こければ御名人であらせられましたから、斯ういふ御歌より外に澤山御名吟はあらせられますけれども、此時の事が極めて私の記憶に止まつて居ります。ごなたかに之を御話になりましたと見えまして確か修身書にも書いてあると存じましたが、是は斯ういふことであります。明治六年の御炎焼に紅葉山から火が起りまして實に火事は偉いものでございまして、あの大厦高樓西の丸が殆ど四時間で焼け落ちました。私はまだ上りたてゝありまして年は若うございまして、馴れませ



ぬ時分で—其前の年に上りましたので—取る物も取り敢へず飛出したのでございますが、誠にどうも早い火でございまして、さうして英照皇太后様が京都から御遷り住みになりました赤坂。そこへ以て行つて兩陛下が御出である。殊に宮中から女官も何もかも皆押込んで参りました。實に其時のことを考へますと、自分の家が狭いなどいふことを考へては濟まないといふことを考へますが、畏れながら明治天皇の御聲は三軍を叱咤するに足るごでも申上るやうな凛々りんげと高く通る御聲、たと御話になる御聲が吾々の部屋に聞ゆる事である。誠に恐懼致します。さういふ譯でございすから、皇后陛下即ち昭憲皇太后陛下の御常の間といふのが十疊敷、其次張出のやうになつて居る所で御次の間はない。直ぐ御入側いりかたの間であります。三疊の御入側の間で御髪を差上げます。女官が後へ行つて梳きますとバツ／＼と當る、本當に御髪上も出来ないと申しますと、陛下には「是でござうだ」と仰せられました御袴を障子の處に段々斯うおつけ遊ばして、迎も御鏡などは立ちませぬから取除けます。女官が迎も出来ませぬ／＼と云ふので夫を御聞き遊ばされて、其時此御歌が出来たのであります。是はもう御自分が學問をもつとしようといふ御意で、此道に勉強しようと仰せられたのであります。私はまだ子供で何にも能く出来もしないのに、私今考へて見ると大膽不敵、能く出来たものと思ひますが、皇后様の御文章をごんなことを相手申上りましたか思ふに寧ろ悪くしてさしたかも知れない、誠に恐れ入つたことであります。あの頃はまだ御手輕であらせられました、そんなにして御學問がお好であらせられました。随分今は東西の歴史

傳記の御議論を申上げたこともございます。其時の御歌でございます。其時は矢張赤坂離宮のお狭い處で大變御庭の植込に接近して居ります。さうすると夏になりますと蟬が來ること、蟬が群がつて参りまして、斯ういふ所へ止まつてミンミンがちゃ〜と鳴くので、何かお話申上げて居りましても御聞ねになりませぬ。「もつと近く來て話せ蟬が鳴いて聞けない」と仰せられます。「本當に仕様がな

い蟬だこと皆捕つてしまつてやりませう」と申上げますと、「止めよ止めよ、あれは儂ない本當に露の命でやつと出て來て鳴くかと思へば死んでしまふ、鳴かせてやれ〜、近く寄つて話をすれば宜いぢやないか、鳴かせてやれ」と仰しやいまして、頓て歌が出來たと言つて御示しになりましたのが

ひとことのしげさきくにはまさりけり

のきはにちかきせみのもろこね

まことにもう此陛下は人の噂が御嫌ひ、「自分は人の悪口を聴くのは大嫌ひ、もう私の一番嫌ひなのは蟬がみんな〜と八釜しいのが嫌ひだけれども、人の噂を聴くより餘程あの方が宜い」と仰せられました。私の洵に結構な御教訓であると存じて居ります。私は誠に有難く存じまして今日もちよつと申上げた次第でございます。それから私は私が戴いた御歌でございますが、即ち心を正しうするといふ文學の中の一つ、是は陛下より御戴きの勅題でございます。其「正心」といふ題で

かへりみてこゝろにとはへみゆへきを

たゞしきみちになにまごふらん

と御詠み遊ばされました。成程人間は實に自分の反省の力さへあれば何も迷ふ筈は無いのでございます。全くさうでございます。それから同じ頃に矢張勅題でお讀み遊ばしたのは、民を治むるは水を治むるが如しといふ語を御詠みになりましたので

あさしとてせけはあふるゝかはみつの

こゝろやたみのこゝろなるらん

と云ふのでございます。是は陛下の御歌の中でも最も御優れになつて居ると高崎御歌所長も御評し申上げた程でございますが、此等は今の罷工同盟とか或は怠業とかいふやうな騒がございまずに就けても洵によい御歌と考へます。無理をしてはいかぬ、成るだけ思ふやうに水の心に任せて流してそれに注意すれば宜いといふ御歌で、まことに有難い御歌と考へます。それから是も御題は勅題で御詠みになりましたのでございますが、刊行の本には折に觸れて詠ませ給へるとございます。誠に醍醐天皇の寒夜に御衣を脱がせ給うた昔の事も思ひ出されます。

あやにしきとりかさねてもおもふかな

さむさおほはんそてもなきみを

此の歌の御出来遊ばした時分の御逸事を一つ謹述致します。皇后陛下は後には御洋装になりましたが

私の上つて居ります時分には矢張御袴袴であらせられました。それで御內衣といふ御下着は俗に云ふ元祿袖で袖下は甚だ短うございますので、一尺一寸五分位、袖は丸く切縫つた斯ういふやうなので、白羽二重でございます。私が御疊み申上げますといふと、こゝまでちやんと袖がすつと上へ折返しに返つて居りますが、短いのですから一尺一寸五分で此處で切てしまへば宜い譯です。少し御肩の御凝りがございまして、それを二枚も御召しになりますときにはこちらが四枚になります。さうしてそれに綿が入つて居ります。それで私さう言つて伺つたのであります。「なせ、皇后様の御召はこんなに餘計な布片せを折込んで御置き遊ばす、誠に御體の爲に能くございませぬ。短かく御切りになつてしまつては如何でございませう」餘計な事を申上ますと「それは私も能く知つて居るがね」と仰しやいまして、にこ〜笑つて御居で遊ばす「御切らせ遊ばしては如何ですか」と又押返して餘計なことを申上げますと「そんなに言ふなら言ふて聽かせるが、あれはね私はちよつとより着ない、あれは皆直ぐ下げてしまふので貰つた人は白で着ても白いのは直色が悪くなるから、それは少し着て又其次々へと遣るであらう。さうして下方では袖が長くないと着られぬさうだから勿体ない、私は一日か二日着る着物で少しの辛捧である。それで勿体ないから私はそれを皆が爲になるやうに、又毎年のことであるからどれ位國家の費用が是で代るか分らぬから、それで斯して置くのだよ八釜しく言ふな」といふ御言葉でございます。私は唯もう恐懼致しまして、「どうも有難うございます。さういふ思召てございましたか」と申上げて私は其時も涙を流

しました。それから丁度其時分のことであらせられました。天皇陛下が丁度北越の方に行幸あらせられました。是は天皇陛下の御事になります。あの時分には鐵道の便が少うございましたので大抵御騎馬であちらこちら御歩き遊ばした。なか／＼御馬車の通る道は少い。それで大抵御騎馬で巡幸遊ばした。其時に——日本の皇室は不思議です。皇室に御入り遊ばすと皆さういふ思召があらせられる。あちらこちらと民が道を造るといけないからして、朕は馬が好きだと言つて馬車の通るやうな道をなるべく造らせぬと、さういふ大御心であらせられます。御附の方が「毎日の騎馬は辛いよ／＼」と申します。さうすると陛下が「なせそんな處へ御出で遊ばす」と申上げますと「だけれど私は馬に乗ることが好きだといふと人民に餘計大きな道を造らせないで済む、馬車が通るやうにするには大變だよ、だから私は馬が好きだといふ御言葉、幾ら馬が御好きだとして田舎道を四十日も五十日も——失禮でございますけれども、一ばい汗になると仰せられました。それで御歸りになりますともう其御召しになつた御服が御襟の邊は眞つ赤になつて、古いのは黒くなつて御汗の所にすつかり塵埃ほこりが着いて居ります。さういふやうにして御歩きになつた。まことに恐入つたことであります。此御歌が陛下の行幸の時に御詠みになりましたので、陛下の行幸といふものは眞の御勤めであらせられて、只今私共はごうも一等汽車が無くなつて長い旅は仕様が無いと言つては申譯がございませぬ、まことに逸樂には馴れますもので、陛下は眞に民を顧みたいといふ御考から山坂の峻峻を騎馬で御巡りになりました。それで御召しになりました御下

召はぐつしりとなつて、まるで黒いのは茶の色に染め變へたやうなのが返つて參ります。如何に御骨折遊ばしたかといふことが分ります。其時分の 皇后陛下の御歌でございますから最も感深きを覺えます。

おほみやのうちにありてもあつきひを

いかなるやまかきみはこゆらん

此陛下の白い御下召の眞つ黒になつたのを拜見致しますから、如何なる山か君は踰ゆらんと云ふ。皇后陛下の御歌が最も感が深いのです。其年は暑い年でございまして九十何度ある、赤坂御所の暑い所で——今は大變變りましたけれども御熱いから吾々は「熱い〜斯んなに熱くては叶はぬ」と申しました。が、皇后陛下には一言も熱いといふことを仰しやらなかつた。「陛下のことを思へ、お上は今どうして入らつしやる。そんな熱い〜と云ふ時ぢやない」一言も熱いといふことを仰せになりませぬ。吾々は何時でも恐入るばかりでございます。どうも名吟として世に残つて居る御歌でございますが。實にどうも立派な御歌でございます。矢張其時分の御歌で

はつかりをまつとはなしにこのあきは

こしちのそらのなかめられつゝ、

是も名歌として世に残つて居ります。まだ還幸の御沙汰はないか知らぬ、あちらも御熱いさうであるが、世の中の人は風流に雁の音を待つか知らぬが自分はさうでない。早く御還りになつて戴きたい。何

か御變りはあらせられぬかといふ心からあちらの空を眺めるといふ麗はしい御歌でございます。私は斯ういふことを申し上げては甚だ恐れ入りますが、昭憲皇太后様といふ方は是までの日本の女性としての殆ど範を御垂れになりました所の龜鑑の御婦人様であらせられやうといふことを私は存じます。是から先は自分はどうあゝ云ふタイプの方は出ますまいと存じます。時勢の進運變化といふのは不思議なものでございまして、又是から先はあゝも遊ばしては居られないかも分りませぬ。それは丁度明治天皇はあゝ云ふ英邁な御方で何でも御果斷でござんゝ御自分が遊ばす。それに御内助遊ばして一言も御背きにならぬ。一言も御自分を御出しにならぬ。全く犠牲献身的に御内助遊ばした。明治天皇陛下にして昭憲皇太后陛下の御いで遊ばしたといふことは實に造り添へた神の御心かと思ふやうな御婦人様であらせられました。考へ出して見まして、是は我儘であらせられたとか、是はどうもといふやうなことは私は八年仕へ奉りましたけれども一度も一言も御在り遊ばさぬ。人間も是までに我を殺して盡すことが出来るものか知らぬといふことを私は感じました。是はどうも公には中上げられませぬ非常な御徳があらせられる。それが私は折々に書いて自分が棺を蓋つたら蓋を開けろといはうと思つて居ります。逆も是から先の女性にはあれは能きませぬ。また或はさう斗もしては居られぬかも分りませぬ。明治天皇であらせられて初めてあの御務めが結構であらせられたと考へます。寔に今度の皇后陛下は慈仁英邁な御方であらせられまして、洵にどうも御耽り遊ばしてあらせられるやうに仄に恐察し奉りますが歴代日月をならび懸け

たる如き坤徳を戴き奉る事は何たる幸福でありませう。蓋し時勢の進運で段々人の心も變つて参ります又變らなければなりませんまい。所謂聖人は世と推移るの道理であらうと存じますか、臣として君を議するやうに當つては誠に恐れ入りますが、昭憲皇太后様は——日本の是までの殆ど武士道で築き固めたことも犠牲献身といふものを以て道を示した方に明治の御代の終に乃木大將靜子婦人が出られたがそれになりまして私は恐入りますけれども心の裡に思ひ浮べまして左様な日本の女性としての美しい光を御放ちになりましてのは此御方で、どうも是からは日本も世界化して参りまして或は女子の代議士も出ませう或は女子の大臣も出るやうな世の中が来るかも知れませぬ。さう致しますとあのやうな稀な我といふものを無く遊ばして、而もしつかりした御考をちやんと御持ちになつて居られました烈女傳中の大賢婦人を見るやうな婦人は或はもう見ぬかも知らぬといふことを私は考へます。それは常に乙夜の御話しながら非常に御祖先の藤原氏の專横といふことを御悲みになりました一層何事にも謙遜遊ばしたのでは無かつたと恐察し奉る事の無いでもありませんでした。さういふやうなことが尙更從順恭謙の資質を御作成し申上げたかと私は考へます。誠にどうも思ひ出しますといふと實に何とも申上げられないやうな御坤徳の數々がございますけれども、今日は是で御免を蒙ります。